



進捗報告

状態機密

浮気誓約書

SCORT
Special
Organized
Crime
Response
Team



山泉 ミカゼ
Yamazumi Mikaze

SOCRT
SPECIAL ORGANIZED CRIME RESPONSE TEAM

処理済

令和X年X月X日

寝取られ捜査官ミカゼ

書き換えられるエリート夫婦の感情

警察省異国対策
特別組

内容

◆登場人物紹介◆	1
注意書き	1
プロローグ：偽りの作戦	2
プロローグ続：偽りの作戦報告	28
第零話：すべてが始まる前に	59
第一話 SOCRT	エラー：ブックマークが定義されていません。
第二話：混入させられた偽りの愛情	エラー：ブックマークが定義されていません。
第三話：エリート夫婦の営みと無能上司に刷り込まれる淫乱な浮気性エラー	ブックマークが定義されていません。
第四話：不安定	エラー：ブックマークが定義されていません。

第五話	・亀裂	エラー	ブックマークが定義されていません。
第六話	久しぶりの休日 デート	エラー	ブックマークが定義されていません。
第七話	デートのあと、課長との相談	エラー	ブックマークが定義されていません。
第八話	忍び寄る邪悪な影	エラー	ブックマークが定義されていません。
第九話	クラブへの潜入捜査	エラー	ブックマークが定義されていません。
第十話	腐敗した組織	エラー	ブックマークが定義されていません。
第十一章	全てが染まる	エラー	ブックマークが定義されていません。
エピローグ	いびつな夫婦のマンション	エラー	ブックマークが定義されていません。
あとがき		エラー	ブックマークが定義されていません。

◆登場人物紹介◆

山泉ミカゼ

【組織犯罪対策特別課特務捜査官】

警視庁のエリート。高い格闘能力と明晰な頭脳を併せ持つ、凛々しく誇り高い女性。薬物組織『ヴァイパー』壊滅に執念を燃やし、正義感の塊のような性格。私生活では夫のキミヤを深く愛しているが、仕事優先で不器用な一面も。

山泉キミヤ

【組織犯罪対策特別課特務捜査官】

ミカゼのパートナーであり、愛する夫。武闘派の妻とは対照的に、穏やかで献身的な性格。事務処理や後方支援でミカゼを完璧に支える「理想の夫」だが、強すぎる正義感ゆえに組織の闇に対しては脆い部分がある。

ミウラ課長

【組織犯罪対策特別課長】

ミカゼとキミヤの直属の上司。一見、温厚で事なかれ主義の「無能なハゲデブ上司」と思われているが、その実態は警察内部を裏から腐敗させる『毒』の起点。

パイソン

【ヴァイパーの幹部】

国際指名手配中の冷酷な男。南米を拠点とする巨大組織『ヴァイパー』の武闘派であり、圧倒的な暴力と強靱な肉体、そして他者を支配するカリスマ性を持つ。

注意書き

免責事項

本作はフィクションです。登場する人物、団体、名称、および事件等はすべて架空のものであり、実在の人物や公的機関（警察組織等）、法律、現実の事件とは一切関係ありません。

本作には、過激な性描写や道徳に反する表現、薬物使用の描写、およびキャラクターの尊厳を損なう表現が含まれています。これらはあくまでエンターテインメントとしての演出であり、現実における犯罪行為や反社会的行為を助長・肯定する意図は一切ございません。

プロローグ：偽りの作戦

暗い廃ビルの廊下。剥き出しで荒れたコンクリートの壁面。入り組んだ構造のせいで月明かりさえもここには入らない。かすかに装備のぶつかり合う音を立てながら目標のいると思われる部屋を目指す。

外国から入ってきたマフィアのアジトということだったが……。想定された激しい抵抗も多数のギャングもいなかった。これはハズレか……。そう思いながら目標のいると思われる部屋の扉を視界に捉える。

僕達チーム・ツーがドアの向こう側にスタンバイする。チーム・ワンがドア横にポジショニングする。チーム・ワンのミカゼ隊長がハンドサインでカウントする。ヘルメットとゴーグルでほとんど顔は見えないが精悍な顔つきのミカゼの表情は容易に想像がつく。つい最近結婚したばかりの僕の妻なのだから。

『3』

彼女の指がカウントする。どうして彼女のチームが突入班なのか…。

『2』

考えてはいけない。迷いは生死に関わる。

『1』

僕とチーム・ツーは彼女の背後を守らなければいけないのだから。

カウントの終了とともにドアを破ってチーム・ワンが突入する。

一転、今までの静けさが打って変わる。ドアが破られる音、突入して銃を構える音。

「手を上げろ！武器を持つな！特殊組織犯罪対策チームだ！」

ミカゼの声が聞こえる。多少緊張しているのか声が普段よりも強めだ。僕とチーム・ツィは事前の計画通りドアとそこに通じる廊下、脱出口を固める。

『こちらチーム・ワン、目標、コードネームパイソンと接触、コピー』

無線からいつもどおりのミカゼの声が聞こえる。ハズレではなかったということと目標との接触成功に一旦安心する。

『チーム・ツィ、パイソンと接触、了解』

僕はすぐに答えた。若干の安堵とともに。

『チーム・ワン、目標を確保、シルバー・ゴールドを押収、コピー』

一瞬立ち眩みのようになる。

ちゃんと集中しなければ。僕達がポジションを守らなければミカゼ達が危険にさらされるのだから。

『チーム・ツィ、キミヤ……シルバー・ゴールドを押収、了解』

????なぜ僕は反射的に本名を口走つたのだろうか。

「手を上げたままだ。心配するな、抵抗しなければ安全は保証する。ほら、その証拠に銃を下ろすぞ。」

「オイ！全員銃を置け！」



壊れたドアの向こうからミカゼの声が聞こえる。僕はバックアップ任務だから中で何が行われているのかはすぐ近くなのに見ることができない。もどかしい。

「おい、ホントにテメーらサツなんだろーな？別の組織の傭兵がサツのフリをしてんじゃないのか」

「我々は嘘をつかない。全員ヘルメット及びゴーグル、フェイスマスクを解除！身分証を開示！」

なにか揉めている気がする。だが、明るい室内では暗視ゴーグルは邪魔だろうし容疑者が武器を降ろしているならヘルメットも不要だろう。身分証を見せても顔と照合しなければ本物であるとは証明できないだろう…。当然のことだ。だけど、なぜか僕はかすかな違和感を感じてしまっていた。どうしてこんなギャングに対してそこまで丁寧な対応をしなければならないのだろうか……。

「よし、納得できたなら商品を確認するぞー」

「くそっ、仕方ねえな」

『こちらチーム・ワン、ミカゼ、パイソン氏の商品をチーム・ワン全員で実際に使用して確認する、コピー』

『チーム・ツー、キミヤ、商品の使用、了解』

無縁越しに状況を把握する。商品とは最新のドラッグのことだ。誤認逮捕を避けるためにも実際に使用して本物がどうか確認するのは普通のことのはずだ。はずだよな……？ブツの純度や商品としての完成度を確認するのはそれが一番なのだから。

「ふー、ふー、なんだ……これはああ……、んふっ、熱いいい」

『こ、こちらあ、ミカゼ、商品はあ本物だ……ドキドキする、ひやああん、コピー』

『商品は本物、了解』

なんだかろれつが回っていないふにゃけたようなミカゼの声。だがどこか酷くインモラルで艶っぽい。そう感じながら、ひとまず誤認逮捕のリスクはなくなったことに安堵する。「こまですべてが疑う余地なく事前の作戦道理のはずだ……。それなのに、なんでこんなに僕は胸騒ぎを感じてしまっているのだろうか。」

「へへへ、隊長さん、ちよつと落ち着いて話しましょうや。まずはウチのヤツラも怯えてますんで」

「ああ、そうだな……。お前たち、その雑魚どものチンポをしゃぶってやれ」

「うおお、マジカよー!」「さつきまであんな威勢よかつたくせにな!」「サツなんつってもとんだビッチの群れじゃねえかー!」「このスケ、そこの売女よりめっちゃかわいいじゃん!」

中から男たちのどこか異様な歓声が上がる。一体何が起こっているんだ……。不安になって無線でミカゼを呼ぶ。

『「こちらチーム・ツー、キミヤ。ミカゼ、どうなっている?状況報告を願う、どうぞ」』

『「んんっふうう……。こつちらあ……。ちゅぶぶぶ……。チーム・ワン……。ちゅぶっ、ミカゼ。んぶっ、つれろれろおお……。ちゅりゅう……。現在い、パイソン氏とおお……。んっくうう……。交渉ちゅうううう」』

そうだった。僕達のミッションはパイソン氏との交渉なのだから中で時間がかかるのは当然だ。なのに僕はどうしてこんなに動転してしまっているんだろうか。

「ははは、隊長さんよおお、今晚はオレのチンポとたっぴりオハナシしてくれよな」

「んっふうう……。ああ、了解した」

室内からどこか艶めかしい妻の声と湿った液体のこするような音がするのを聞きながら返信する。

『パイソン氏との交渉、了解』

「おいおい、ミカゼちゃん。ちょっと鬱陶しいんじゃないか。ちょっとミッシェンに集中しろや」

「あ、あああ、わかった」

室内からミカゼとパイソン氏が話している声が聞こえてくる。どうやら僕は繊細な交渉の邪魔をしてしまったようだ。あんなに一生懸命ミカゼは頑張っているというのに。

『こちら……んんんっ……ふうう……チームう・ワン、んんん、ミカゼ！重要なあ、あつくつふうう、身体交渉のためにいい……ひゃあああんん、しばうくう……んふう♡、むっ無線封鎖をお、行つうう♡』

その一方的な発言の後で無線が外されて投げ出される音がした。内部でどんな交渉が行われているのかはもはや僕にはわからない。できることは背後に注意しながら耳を澄まして室内の音を聞き、ミカゼの交渉を応援することだけだ。『応援』こそ、夫の最大の役割なのだから。

「あつくつふうう……太いいいいい」

「へへへ、純度の高いブツのせいですっかりトロトロじゃねえか」

「んふうふうふうう♡イイいいい……あつくつう」

一体どんな交渉が中で行われているのか…。

★★★

数日前、私、組織犯罪特殊チームの山泉・ミカゼは会議室でブリーフィングを行っていた。

「今回のオペレーションは最近国外から入ってきたマフィア、ヴァイパーのアジトを急襲し、彼らの持ち込んでいるドラッグ、『シルバー・ゴールド』の押収だ！」

我々組織犯罪特殊チームは都市急襲装備着用で本作戦にのぞむ！チーム・ワンのリーダーは私、ミカゼ、チーム・ツールのリーダーはキミヤとなる。「ここまでなにか質問は？」

真つ先にキミヤの手が上がる。想定通りだ。きつと彼なら、私の見込んだ男である彼ならそのように行動してくれると考えていた。

「チーム・ワンは突入班だけど、今回のチーム・ワンのメンバーは全員女性で経験が少ない隊員も多い。チーム・ワンとチーム・ツールのメンバー配置を再考すべきじゃないかな」

キミヤの質問は当然のものだ。私だつて彼の立場なら同じ質問をするだろう。

「キミヤ一等巡査、質問感謝する。今回の班割りについては作戦の許可とともに上の方から指示されており、私の方からも再編を提案したが受け入れてもらえなかった。現場の作戦内容にまで介入されるのはいささか腹に据えかねるところだろうが、今回は私に免じて受け入れてほしい。当然、チーム・ワンのリーダーである私がつつがなく作戦が実施できるように最新の注意を払う」

仲間たちに目をやる。チーム・ワンに配属された新人達の中には若干不安そうなものもいるが、全体としては闘志に満ちている。なんといつてもこの組織犯罪特殊チームはヤクザやマフィアの対策として作られた特別部隊であり、部隊員の多くは十分な技術と経験をもっている精鋭たちだ。

「それからもう一つ上から指示が来ている」

露骨に嫌な顔をする隊員達。

「ヒメノ、チーム・ワンのしんがりのお前には肩にカメラをつけて撮影してもらう。我々の作戦中に不法行為がないという証拠にするぞうだ」

「は、はあ…」

ヒメノが困惑したような顔をする。まだ、うちの隊に来て間がない彼女は不安そうだ。そもそも彼女は前線任務を希望していない。にも関わらず上からのこういった指示は納得がいかないのだろう。

「今回の突入部隊は我々だけだが、捜査に関わった機関や人数は少なくない。だからこそ、自由に動けないということもあるだろうが、どうか理解してくれ。」

では、具体的な作戦計画を説明する」

あからさまに気が乗らない顔の同僚たちを説得するように私は話を進めた。

その数日後、深夜の廃ビル。カビ臭い匂い、ホコリが暗視ゴーグルに写ってキラキラしている。剥き出しで荒れたコンクリートの壁面。カチャカチャとかすかに装備のぶつかり合う音を立てながら私の後ろに続くのはチーム・ワン。今回の編成は部隊内の男女別となっている。女性隊員が積極的に動かなければならないということはドラッグの取引だけでなく性犯罪なども想定されているのだろうか…。

事前の想定ではマフィアの薬物取引の現場だということだったが…。

ヴァイパー、それが今回の標的組織の名前だ。とはいえ、建物に入ってから未だにほとんど人気がない。見張りもおらず、ドローンや監視カメラの痕跡もない。これはハズレか……。そう思いながら目標のいると思われる部屋の扉を視界に捉え、ハンドサインで後ろに続く仲間たちを止める。



暗視ゴーグル越しにキミヤと目を合わせる。今まで何度も死線をくぐってきた戦友であり、私の愛しい人だ。目だけでも言いたいことはお互いにわかる。つまり、…準備完了ということだ。大きめに手を見せてハンドサインでカウントを開始する。

そして、一気にドアを破つて中に突入した。ここまでの人気の無さからここに容疑者はいないと考えていたのだが、幸か不幸かドアを破った瞬間、内部の明かりが目を焼く。

それにもひるまずに突入する。もはや音を気にする必要はない。一気にチーム・ワン全員が突撃し、銃を構える。

「手を上げろ！武器を持つな！特殊組織犯罪対策チームだ！」

事前に見ていた今回の作戦の標的、パイソンが大量の木箱の上に座っていた。一応、手を上げているようだ。他にはパイソンの手下らしき男たちが四人ほどいる。全員、抵抗する意志はないようだ。衝突はなく、状況は安定していると判断し、無線に手を伸ばす。

『こちらチーム・ワン、目標、コードネームパイソンと接触、コピー』

『チーム・ツー、パイソンと接触、了解』

無線越しにキミヤのホツとした感情が感じられる。こういった作戦ではとかくファーストコンタクトが重要だ。そしてそれをクリアした今、私も少しホツとしている。

パイソンに銃をむけて箱から降りるように命令する。そして箱の蓋を開ける。なにかよくわからない紋様が描かれた袋の中に大量の粉が入っている。そんなパックが何十個も…あった…。どこ…かで…見たことがあったような…そんな模様だ。見ているとクラクラする。立ち眩みだろうか？こんなときに…？

自分自身の意識をはつきりさせようと全員に発報する。

『チーム・ワン、目標を確保、シルバー・ゴールドを押収、「ロビー」』

シルバー・ゴールドを押収、それはマフィア内部での今回の商品のニックネームだったはずだ…。なんで私は…敢えて、そんな名前を…いや、これでいいのだ。私たちの任務はあくまで『パイソン氏とシルバー・ゴールドの取引をして海外の巨大マフィアであるヴァイパーに貸しをつくる』ことなのだから。

『チーム・ツー、キミヤ…シルバー・ゴールドを押収、了解』

キミヤのためにも今回の任務、絶対失敗できないのだ。

まずは殺気立っている犯罪者共の緊張感を緩和しないとな。

『手を上げたままだ。心配するな、抵抗しなければ安全は保証する。ほら、その証拠に銃を下ろすぞ』

パイソン氏に見えるようにメイン武装のサブマシンガンを床に置く。

そして周囲のチームメンバーたちにも同様にするように指示する。

どうしてだ？パイソン氏に何度もあったことがある気がする。それどころか、なんで私はこの男を見ているだけで胸を高まらせ、股間を湿らせてしまっているんだ？！

『オイ！全員銃を置け！』



チーム・ワン全員が武装解除する。これで多少は安心感が生まれるだろう……。そんな甘い想定を否定するようにパイソン氏が口を挟んだ。

「おい、ホントにテメーらサツなんだろう？ 別の組織の傭兵がサツのフリをしてんじゃないのか」

確かに、言われてみればそのとおりだ。ゴーグル、ヘルメット、フェイスマスクで完全に顔を隠した状態では緊張緩和やいい交渉など期待できないだろう。すぐに対策を部下たちに命令する。

「我々は嘘をつかない。全員ヘルメット及びゴーグル、フェイスマスクを解除！ 身分証を開示！」

マフィアの連中がニヤニヤこちを見ている前で全員が武装解除した状態で顔をさらし、IDを見せる。ヘルメットとフェイスマスクの下で汗がこもり、全体的に艶っぽく見える。

「よし、納得できたなら商品を確認するぞー」

マフィア共の下卑た笑みを無視して命令し、箱の中の『商品』から一袋を取り出す。

「くそつ、仕方ねえな」

『こちらチーム・ワン、ミカゼ、パイソン氏の商品をチーム・ワン全員で実際に使用して確認する、コピー』

根拠なしに彼らを挙げるわけには行かない。これが本物だと一番手っ取り早く確認する方法は使用してみることだ。そして私一人だけでは客観的な立証とはいえないためチーム全員で確認する必要がある。そのために女性だけで突入したのだ……。

あれ、どうして……。そう一瞬間に思ったが、パイソン氏の顔を見た瞬間、そんなことはどうでもいいと気づいてしまう。

『チーム・ツー、キミヤ、商品の使用、了解』

キミヤによる薬物使用の了解をきくと、袋の口をあけて、中の白い粉を手のひらに出す。黒いミリタリーグローブの上で麻薬の結晶がキラキラ輝く。部下たち全員が同様に武器から手を離し、手元にクスリを出しているのを確認すると、隊長として真つ先に私は手のひらの粉を鼻に近づけ、一気に鼻から吸引する。

「ふー、ふー、なんだ……これはああ…、んふっ、熱いい」

粘膜からの吸収はキマるのが早い。吸い込んで数十秒で全身から汗が吹き出し、動悸が激しくなる。視界がフラッシュを焚いたように明るくなり、廃墟が輝いて見える。

『「こちらあ、ミカゼ、商品はあ本物だ…ドキドキする、ひやああん、」ピー』

クスリが効き始め、すべてが美しく見える中で感動しながら旦那に報告する。

『商品は本物、了解』

キミヤの声が格好良くて下腹部が甘く濡れる。

「ビビビ、隊長さん、ちょっと落ち着いて話しましょうや。まずはウチのヤツラも怯えてますんで」

その声を聞いて、意識がパイソン氏の方へ向かう。資料で見たのと同じ姿形なのになぜかとても魅力的で格好良く見える。ほとんど本能的に惹かれてしまう気がする。キミヤには感じたことがない本能的な興奮。なんて格好いいんだ……。メスとして私の心が開かれていってしまう。胸が熱い、いや、股間が熱いのだ。見ているだけで湿っていくのを感じてしまう。

そして、当然パイソン氏の言葉の響きがまるで直接子宮に注がれる熱いモノみたいに惹かれてしまう。



「ああ、そつだな…。お前たち、その雑魚どものチンポをしゃぶってやれ」

作戦計画通り部下たちに命じる。

「うおお、マジカよー!」「さつきまであんな威勢よかつたくせになー」「ビビらせやがって、ただマンのくせに!」

チンピラたちが興奮したような声を上げる。さつきまでつまらないありきたりなチンピラの三下だと思つて無視していた連中だが今見直せばなかなか格好いい。街なかで声をかけられれば興味はなくても話を聞いてしまいそうなのだ。胸が高まつてしまう。

部下たちがチンピラ共の前で膝をつき、グローブを外す。彼らの指がチンピラ共の股間をズボン越しに撫で回す。いや、彼らだけではない。私もだ。息を荒げながらパイソン氏のズボン越しにやさしく太い肉塊を撫でながら確認する。全員シルバー・ゴールドがキマつて眼の前のオスたちの魅力に逆らえなくなつてしまつている。

キミヤのものは全く違う巨根。撫でているだけで心臓が激しく鼓動する。

ああ、すでに固くなりつつある。指で触るだけで簡単にわかる。すごい……。♡。

んっちゅうううう、我慢できずにズボン越しにその肉茎に吸い付く。口内のありったけの涎を舌でパイソンのズボンに染み込ませながら今度はズボン越しに舌でソレを撫で回す。さつきよりも更に硬くなつていているのを感じる。

ああ、デカい……。

湿ったズボン越しに感じる形。感動さえ覚えながら口を離すと、何も考えずに敵だったギャングのベルトを外し、ズボンを下ろす。ボロンと中から飛び出した男根は見たこともないほどクールだ。私もおぼこではないから多少は知っているが、パイソン様のモノは別格に見えた。

しかも、私はこれをよく知っている。キミヤのしょぼい奴よりもずうっと。

見ているだけで全身がソレを求める♡とんでもなく魅力的でチャージングなオチンポ♡匂いも私を誘惑し、勃起した力り首がまるで私のキスを求めているようだ。

そして私にそれを拒否する理由はなにもない。

ちゅううううう♡尿道口に深く口づけする。まるで少女のようにドキドキをたくさん込めながらロマンチックに…。オスの匂いがまるで私の脳天をぐち抜いたような衝撃。ヤバイヤバイヤバイヤバイ。本能的な恐怖感すら感じながら勃起したパイソン様の肉棒を口全体で包む。どう奉仕すればいいのか、迷うこともない。

まるで口の中が犯されているような気がする。オスを感じれば感じるほど切なくて、ますます深く感じたくなってしまう♡

『こちらチーム・ツー、キミヤ、どうなっている？状況報告を願う、どうぞ』

ああ、もうこんなときに…。私はオチンポ様を吸い上げるのに忙しいと言うのに！空気の読めないキミヤめ！

面倒だがプロトコルに従って返答しなければならない…。すこし苛つきながらもオチンポから口を離さずに応答する。



『んんっふうっ…、んっちらあ…ちゅぶぶぶぶ…チーム・ワン…』

ああ、亀頭から先走りが滲んで…すごく美味しい…♡。

『ちゅぶっ、ミ、カゼ。んふっ、つれろれろおお…』

血管の浮き出たパイソン様の裏筋、格好良すぎるううっ♡♡キミヤのシヨボいのと大違いだ♡

『ぢゅりゅう……現在い、パイソン氏とおお…んっくうう……交渉ちゅっくうう…』

口に巨根全体を頬張るとますます好きになる。他の男のことなんて考えられない。はやくこのオチンポを私にぶち込んでガンガンいじめてほしい。もっともっとこのオチンポを感じたい。好きだ！愛している♡んふうう。

「ははは、隊長さんよおお、今晩はオレのチンポとたっぷりオハナシしてくれよな」

そんなこと言われるまでもない。クスリはたっぷりあるし、私達の任務は体を使ってヴァイパーの皆様と良好な関係を築き、安く高純度のシルバー・ゴールドをお譲りいただくことなのだから。

「んっふうう…、ああ、当然だあ♡」

『パイソン氏との交渉、了解』

だから、キミヤ。たのむから私とパイソン様のハメハメセックスミッションの邪魔をしないでくれ！

パイソン様が私の髪を掴んで逞しい胸板のところまで引つ張り上げて私の目を覗き込む。格好いい♡そして、なんてたくましい胸板だ♡こんな胸に抱かれたらメスならみんなドキドキして恋に落ちちまうだろう。ヤバイいいい。

「おい、ちよつと鬱陶しいんじゃないか。ちよつとミッションに集中しろや」

そっだよな。キミヤ、鬱陶しすぎるな。パイソン様も私と同じ気持ちなんだ♡うれしくて股間をキゅンキゅンさせながらハンサムすぎるパイソン様の口に自分から媚びるように唇を重ねる。

ちゅううううと愛情を確かめるように対象の唇と粘膜接触し、恋慕たつぷりの涎の橋をカレの唇と私の間にかける。そのあとで全力で媚びるような表情をつくってパイソン様に同意する。

「あ、あああ、わかった」

というか、今の私ならパイソン様の言葉ならどんなお言葉でも同意してしまうだろう。こんなにたくましくて格好良くて素晴らしい人にあつたことはない。この人の腕の中で今までにないほどドキメイてしまっている。メスの本能によりこの人の言葉より正しい言葉なんてもう感じられない♡

『「こちら…んんっ…ふうう…チームう・ワン、んん、ミカゼ！」』

パイソン様とアイコンタクトをしながら答える。無線のボタンを押していない方の手は命じられなくても自分のベルトを外し始めている。いや、命令などいらぬ。まず第一に私はもうガマンできなくなっているのだから。

『重要なあ、あつくつふうう、身体交渉のためにいい…ひゃあああん！』

第二にこれはそういう任務なのだ。体を楽しんでいただいて良好なカンケイを作る♡オチンポに媚び媚びして、オマンコでハメハメコミュニケーションするのがチーム・ワンの本当のお仕事♡なのだから。さっきまで忘れていたが、今思い出した。こうやってオマンコで仲良くするためにここに私達は来たのだ。

『しばうくう…んふう♡、むっ無線封鎖をお、行っうう♡』

キメセクの邪魔になる連絡などいらないのだ。無線機を外して放り投げる。そのまま続いて私のズボンもベルトを外し、ジッパーを一番下まで降ろし、脱げるだけ脱ぐ。もうぐちゃぐちゃに湿ったパンツは力ずくで引きちぎった。

早く、早く、早く、この超遅いオチンポをぶち込んでもらいたい♡ドキドキしちゃってガマンできない♡初恋よりもロマンチックなオチンポだぁ♡

「あつひつくううう…太いいいい」

早々に銃を放りだした手でオチンポを支えてすっかりトロトロな私のメス穴にあてがう。脳内がふわふわして輝いて見えるおちんぼ。触るだけでドキドキしてしまうモノの上にゆつくりと体を沈み込ませていく。

「んんんっあぁ♡♡♡くくううんん♡」

「これ、やっぱあぁ…んんん♡私の中をおしひろげてくっくううう♡♡♡。キュンキュンしてうれしい♡♡♡熱くて♡硬くて♡大好き♡だぁあぁ♡」

「へへへ、純度の高いブツのせいですっかりトロトロじゃねえか」

そうーそうーそうなのぉおぉーパイソン様のおちんぼに恋しちゃってトロトロになってリュんだぁあぁあぁ♡

「んんんっ！っ！っ！ほおおおおん♡」

やっぱあぁ♡良すぎて腰動いちゃう。う。ママン「パイソン様のガチガチチンポ」シコシコみがいちゃってりゅうううう♡。ズンズンって子宮で感じてええ、もつともつとすきになっちゃってっ♡

「んんんんんんん♡♡♡イイイい…あつひつくううう♡♡」

「こんなの、知らないいいいい。セックス一回でこんなにダメになっちゃうなんて知らないいいいい♡

「ハハハ、警察のくせにとんだビッチだな。お前んとこのボスに見せてやりたいぜ」

「ひゃああ♡らめええ♡んんっほおお、こんなあ、ミッションできてないいいのおおお、みせちやらめれすうう♡」

「そうだよなあ、お前の仲間もみんなそこらのウリやつてるメス共よりもキメセクエンジンジョイしちまつてるからなあ」

そう言われて周囲を見渡すと部下たちがそれぞれチンピラ共とハメ合っていた。拒絶するどころかみんな私と同じように目を輝かせておちんぽに吸い付き、マンコでザーメンを絞って快感に酔いしれ、最愛の人とするようなキスを嬉々として行っている。サカリのついたメス犬のように後ろから犯されている者。マンガリ返してアナルに装備のサブマシンガンをぶち込まれながらチンポを啜えている者。チンピラのケツアナをうっとりしながら舐めているもの。みんな幸せそうだった。

そして、私はヒメノと目があつた。一番年下で一番しんがりだった彼女は役割通り撮影係だ。

「アハハハ、せんばーい、アハ顔ちよーブスですよー☆わらえるー☆」

ケラケラ笑いながら下半身丸出しでどこから持ち込んだのかバイブを両穴に突っ込んだ状態でインタビュウして回っている。そんな彼女と目が合う。嫌な予感がした…。

「ギャハハハ、隊長さーん、なに冷静な顔してんですかー、盛り上がってきましょーよ☆」



そついいながらこつちに来る。そして、私の前に来るとおもむろにタクティカルベストを脱いだ。タクティカルベストの下から防弾ベストに固定された小型のタブレットが現れる。そこに映されていたのは私達のボス、組織犯罪課のミウラ課長だった。

「ひゃあああ、課長うううう」

私はパイソン様の上で腰を振りながら思わず敬礼する。今まではミウラ課長は無能で使えない典型的な役人だと思っていたのだが、何故か今はとても格好良く見える。ハゲ頭は経験の証だし、現場に出ないのは有能な指揮官の証拠で、責任をいつも下に押し付けるのはリスク感覚が優れているからだ。私はミウラ課長を軽く見すぎていた。

課長などと呼ぶことさえもおこがましい。ミウラ様、私の本当の御主人様だと言っている。

「作戦はうまくいっているようだね」

「ひゃいひゃい！んっふううう、じゅ、順調れすうう！ー」

だってこんなに気持ちよくてパイソン様とオマンコとオチンポの関係まで作れているんだから計画以上だ。

「シルバー・ゴールドは確認したかね」

「ひゃいひゃい！よかったれすううう」

「もう一度私の目の前で確認したまえ」





さすがミウラ様だ。ちゃんと重要なところは自分の目でチェックするなんて。私の首からぶら下がっている。た捜査官のＩＤの上にヒメノがシルバー・ゴルドの小山を作る。ドキドキするほど魅力的なケミカルの香り。

「ひゃい、いいい、チーム・ワン、ミカゼ特等捜査官、一級危険薬物ううう、んんっふうう、ほ、シルバー・ゴールドのおおクオリティチェックいたしますううう！」

差し出されたクスリの白い山にカメラの前で鼻を突っ込み一気に吸い上げる。

「テ、ハ、ニ、ノ、ヲ、チ、ト、コ、シ、セ、ユ、ズ、ル」

さつきよりも多かったせいか一瞬ふつと意識が心地よく飛んでしまう。

「んっ……くっっほおお……おっ！っくおおお！」

「イイレすうう純度高いいい！――ぜんぶキラキラしねえええ、サイコーれすううう」

「おお、ちゃんと本物のようだ。ミカゼちゃんがこんなに壊れるとは」

課長おお、なんであんなに格好良かったのに気が付かなかったんだろう…。タブレットの向こう側にいなかったら土下座してでも抱いてもらうのに♡。ヤバイヤバすぎる。泣いて格好良くて濡れてドキドキしちゃう。

「ミウラ課長おお♡こんどおおお、おちんぽしゃぶらせてくらいいいい♡んっふっうっうっ、

私いい課長のオチンポもおお興味あるんですうう♡んひゃああ」

「さすが、使用者の本能を狂わせ目の前の異性に夢中にさせる最高のレイプドラッグの名に恥じぬ効用のよ
うだな」

わぁ♡冷静に分析できる課長頭いい♡マン「バカの私とは大違い♡私のこと犯して冷静に濡れ濡れエロバカマン」の分析してほしい♡課長のスマートなザーメンもドピュドピュ注いでほしい♡

「おい、俺のことを忘れてるんじゃないか。もつとケツ触れや」

その言葉とともにパイソン様が一気に下から突き上げる。その衝撃に私の魂が揺さぶられてしまう。

「ひつぎゅうううう♡♡♡ごめん、んっなっしやいいいい♡おっひよおおお♡♡♡」

すごい♡中にズンズン来てる♡これ、やつばああ♡

「では、本題に入ろう」

マン「に全集中の私にかわって課長が話を進めてくださる。私の役目はオマン」でパイソン様を楽しませて交渉を有利に進めることからあ、オマン」に集中すればいい。それが作戦なのだ♡。というかそれ以外私に価値なんてないし。

「そうだな、とはいってもこんだけの量だ二百万はほしいな」

「それはふっかけ過ぎでは。君たちの存在を黙認してやっている上に今回はこうしてうちのスタッフまで貸してやったんだぞ」

「あん♡そ、そうれすうう♡パイソンさまああ、私、ただマンじゃあかないんですよおお♡」

腰をくねらせて快感に耐えながら膣内の巨根を締め付けてアピールしてみせる。

「百万だ」

「バカ言うんじゃない。誰がそんな格安で渡すか！」

「ひつぎゅうううう♡♡♡♡♡」

まるで怒りをぶつけるようにパイソン様が私の腰を掴んで一気に下から突き上げてくる。遅しくて暴力的。キミヤには絶対できないハードなエッチ。やつぱりいいいいいい♡♡。腰を掴まれただけでトキメいてしまう。

「百九十万、これ以上はびた一文まけられないぜ」

「んんんはああ、そんなああ♡パイソン様ああ、私のオマン」に免じてえ…んんんんんん、もう少しいい、やすくうってくらさいいいおお♡お願いれすからああ」

一生懸命パイソン様に媚びてオネダリする捜査官。あくまでも私は課長様の側の人間。商品を手くしてもらわないと。惨めなほど媚びるジャンキー捜査官として場を和ませておちんぽに媚びないと。

「クソっ今晚はめいいっぱいお前らポリ公とキメセク楽しんでやるからなー!」

「百五十万で了解しよう。さもなくば彼女たちを引き上げさせ、外で見張っている彼女の旦那に突入させて君たちを挙げてもいいんだぞ」

「くっ、警察のくせにオレよりもきたねえ……、わかった」

んんんんんん、さすが課長様。交渉がうまくてなんて頭が切れるんだ。外で立っていることしかできないキミヤまで交渉材料にできるだなんて。画面越しに見ているだけでも好きになってしまふ。愛してしまふ。キュンキュンして子宮が求めてしまふ♡

「ミカゼ君、報酬を渡したまえ」

「はひひひ♡」



腰を振って、快感に体をガクガクさせながらタクティカルジャケットのポケットから札束を取り出す。いつ入れたのかは全く思い出せないが、課長様に命令された瞬間そこにお金があることを思い出した。

「ふーふうふう♡これがあぁ、お金れすう♡♡」

「へへへ、よいしい娘だ。じゃあ取引成立だな。朝まで楽しむぞ」

「ミカゼ君、くれぐれも失礼のないようにな」

課長の業務命令にキーンキーンして、敬礼しながら答える。

「りょ、りようかいれすう♡オマンコでええ…あつはあぁあんん、全力で任務遂行いたしますう♡」

正直もう我慢できない。交渉など無視してオマンコに集中したかった。メスらしく全身で快感を楽しんで、今腔内にくわえこんでいるおちんぽだけ感じていたかった。ただただ本能のままに。やっとエッチだけに集中できる。壊れたドアの外で守ってくれているキミヤのことなども、もうどうでも良かった。このチンポ、チンポだけ大切でおまんこでじゅっぶじゅっぶ扱き上げて快感にすべてを任せたい。

数時間後、組織犯罪特殊チームのチーム・ワンの女性たちはホコリとザーメンまみれになっていた。全員が下半身丸出しで秘部からマフィアたちの精子を垂れ流している。秘部だけではない。顔や彼女たちの装備のあちこちにもザーメンのシミがついている。粗雑に放り投げられた銃やヘルメット。彼女たち自身も乱暴な行為を廃ビルの一室で敢行したためあちこち傷ついているが、豊富なドラッグのため相変わらず壊れたままの状態だ。

「パイソン様、こちらから逃げてください♡」

ミカゼがまるで最愛の人に言つかのように心を込めてそう言つて部屋の影にある目立たないドアを開ける。

「オレヲをハメたりするつもりじゃねえだろうな」

疑うようにそういうマフィアのボスにどこか虚ろな笑みを浮かべながらミカゼが媚びる。

「まさかあー私の旦那は全然関係ない場所を馬鹿みたいに張っているのですね、こっちは安全ですよお♡」

レイプドラッグ『シルバー・ゴールド』の効果で相変わらず目の前の男は全員最高の男に見えている彼女に不貞の罪悪感は無かった。

「よし、お前ら、撤収だ。床に落ちてるお土産を忘れるなよ」

パイソンが部下のチンプピラたちに命令し、無造作に投げ捨てられた警察の装備品の銃やヘルメット、高価な暗視ゴーグルなどを拾い集めさせる。そしてそれと報酬をもって事前のブリーフィングでは触れられていなかった脱出ルートから逃走する。

ミカゼたちが正気に戻るのはその後、全員がズボンを着直してからだった。そして意識が戻った後でさえも、ヘルメットや銃がないこと、あちこちにザーメンのシミが付いていることには気が付かない。

キミヤを「コールする」。

『こちらチーム・ワン、無線封鎖終了。部屋は空だったが商品と思しき箱がある、「コピー」』

『チーム・ツー、交渉はどうなった？』

『交渉？なんのことだ？チーム・ツー、証拠品の押収の援助をお願いします』

『了解、オーバー』

こうして組織犯罪特殊チームは大量の違法薬物を押収し、腐敗した上司のところに持ち帰ることにしたのだった。

★★★

「組織犯罪特殊チーム帰還いたしましたー」

キミヤとミカゼが夫婦揃って課長の前で敬礼する。その傍らには大量の

『押収』した違法薬物。二人の記憶にはマフィアとの交渉も、マフィアにお金

を払って薬物を入手した記憶も存在しない。それどころかマフィアとあった記憶すらなかった。キメセクの
事実はなく、捜査の間キミヤは普通にドアを見張っていただけであり、ミカゼは放置された箱の中の違法薬
物を発見しただけなのだった。

「」苦勞」

偉そうにそついうミウラ課長に二人共内心穏やかではない。無能なくせに偉そうで最低な男だと思ってい
る。だがそんな二人は気が付かない。課長のパソコン上で、ミカゼがマフィアのボスの上でみだらな浮気セッ
クスに興じる動画が再生されていることに。これからも都合の良い「マ」として心も体も腐敗した上司に利
用され続けることに。忘れさせられているが確実に吸引させられたドラッグはミカゼの体を蝕み、彼女の体
はどんどんセックスに溺れていっていることに。



プロローグ続：偽りの作戦報告

「椅子は三十脚でよかったか？」

何の変哲もないホテルの研修室で椅子を並べながらパンツスーツに身を包んだ僕の妻、ミカゼに確認する。

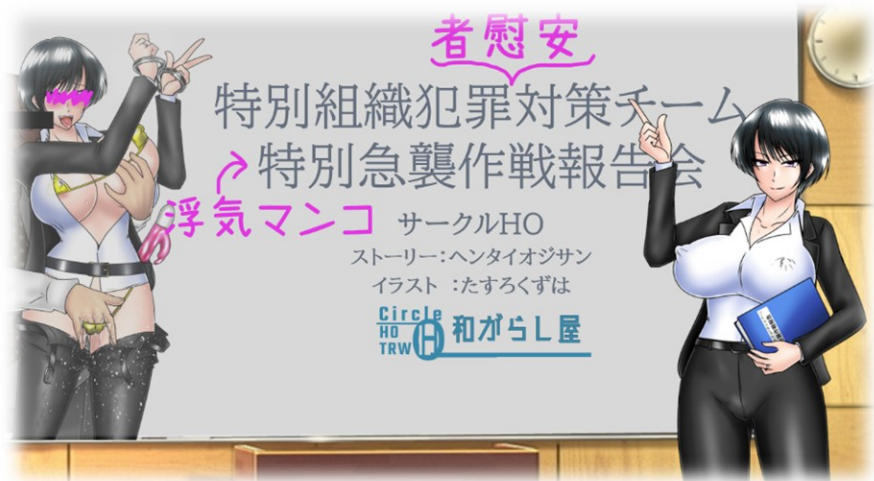
「ああ、そつだ。事前に決めたとおりに並べてくれ」

「了解、チーム・ワン隊長、特等巡査殿！」

冗談めかしてそういうとミカゼはいつもの堅苦しい表情を若干揺らがせる。美しいと言うより格好いいと言ったほうがしっくり来る彼女だが、パンツスーツ越してもその魅力的な肢体のラインは明らかだ。未だに彼女と結婚できた事実が信じられないほどに凛々しい理想の相手！

「チーム・ツー隊長、キミヤ、報告会が始まったら不謹慎は慎むように！」

そう厳しい目を向けながらもウィンクして見せる。格好いい彼女の姿とそのおちゃめな振る舞いのギャップが旦那であるところの僕を殺しに来ていると言っても過言ではないだろう。



「アイアイサー」

そんな僕達のやり取りを他の課員達がクスクス笑いながら見ている。普段の特別組織犯罪対策チームのピリついた空気とは大きく違う。というのは、今日はただの報告会であり、死線をくぐる作戦ではなく、むしろそれが終わったあとのリラックスした空気があるからだろう。

『特別組織犯罪対策チーム』、国際的な麻薬カルテル、通称『ヴァイパー』への対策として新たに設立されたチームだ。普段の任務は主に重武装の海外マフィアの制圧。今日のようなただのプレゼンとはわけが違う。もちろん俺とミカゼは夫婦でそれぞれチーム内のサブユニットの隊長を務めている。だからこそ課内の風紀が緩まないように普段から意識していた。ただ、今日のような楽な日はどうしても気持ちいが緩みがちになってしまうのは否定できない。

「おい、夫婦でイチャコラやっている場合かね？」

今日の会議次第ではチームの廃止や予算の大幅縮小もありえるんだぞ」

そうキャンキャン叱責してくるのはミウラ課長、『特別組織犯罪対策チーム』の所属する『特別組織犯罪対策課』の課長だ。

現場に出たことがないのが丸わりのぶよぶよと肉のついただらしない体型に中途半端に禿げかった頭、嫌味っぽい口調が課内で嫌われているいいけ好かない男だ。課内でただ一人実力ではなくコネで入ってきた人員だ。ミカゼなんかは家ではミウラ課長のことを「あのハゲ」などと辛辣に呼んでいたりする。

「はいはい、別に遊んでいるわけではないよ。ちゃんと任務は果たすから課長は口を突っ込まずに見ていてください」

ミカゼが飄々と上役に対して言い返す。さすがの胆力だ。そしてそんなクールな彼女だからこそ隊員たちも安心して命を預けられるのだ。

「まったくー上のものに対してなんて口のきき方だー君のような者がチームを率いているから『特別組織犯罪対策チーム』は扱いづらいなどと言われているんだぞ」

「誰がなんと言おうが知らないですね。私達にとつて大切なのは市民の安心であつて上の方がどう思っているかじゃないんだから」

ミウラ課長を心底軽蔑したような目で見ながらミカゼがそう正論を言い放つ。

「き、君というやつは…」

とつさに言い返そうとしたものの無能なミウラ課長は何も思いつかなかつたらしくまな板の上の「イ」のようにただパクパク口を開け閉めするだけだった。

「そろそろ時間だ。課長も配置についてください」

そんな課長の神経を敢えて逆なでするように言つて最終確認し、会議室のドアを開けるミカゼ。同時に何人かがどやどや入ってくる。今回の報告会は新しく設立された『特別組織犯罪対策課』自体の存在意義を幅広く説明するために警察関係者だけでなく政財界の要人も招いた大掛かりなものだった。そのため警察省ではなくわざわざ高級ホテルのカンファレンスルームを貸し切り、細部にまでこだわった報告会となっている。

報告会のゲストのメンバーはどことなく人相が悪い気がするが、おそろく気のせいだろう。



イカツイ体型にタトゥーなんかがチラ見えしていたりする。だが、実際マル暴の刑事などはヤクザと見紛うばかりの人相だったりするし、警察内部で人相など気にし始めたらしきりがない。

「マイクテスト…、マイクテスト…、皆様、聞こえますか」

予定の席が七割ほど埋まったあたりでミカゼがマイクの最終確認をする。当然ながら問題なく、会場の中のチームメンバーたちがそれぞれ問題ないと報告する。こういったきちんとした報連相は警察の組織として当然の部分であり、その中でもかなり鉄火場が多いうちのようチームでは死活的に重要なことだ。

「では、これから『特別組織犯罪対策チーム対ヴァイパー特別急襲作戦報告会』を始める。本日、皆様に説明するのは、私、特別組織犯罪対策チーム、チーム・ワン隊長、山泉ミカゼ特等捜査官だ。よろしく願います」

そう言つて真面目な顔で敬礼すると壇上のスクリーンに事前に用意していたプレゼン資料を投射する。

「まず今回は組織犯罪に明るくないゲストもいると思われるので、今回のターゲットである麻薬カルテル『ヴァイパー』の説明から開始する。

『ヴァイパー』は中米の麻薬カルテルの連合が母体となっていて、一部の国の諜報機関も関わっていると推測されている。とは言つものの、我々対策チームにとってより重要なのは彼らが日本の一般的なヤクザよりも重武装であり最新のテクノロジーに精通し、さらに最新の合成麻薬を持ち込んでいることだ」

普通ならこれだけの要人の前で緊張するところだがミカゼは淡々といつもの調子で説明していく。キリッとした彼女の横顔は夫としてのひいき目なしでも思わず見とれてしまうほどクールそのものだ。

「武器の多くは分解され、中古車などの一部として持ち込まれて国内で組み立てられていると思われる。ほとんどの構成員が拳銃をもっており、他にはアサルトライフル、グレネードランチャー、手榴弾、自爆ドローン、IEDなどの使用が国内で既に確認されている。このためヴァイパーへの捜査は一般の部署では対応が困難であり、我々『特別組織犯罪対策課』が設置される運びとなったという経緯がある」

スライド上ではここ数年で起きた主要な事件が表示される。日本のヤクザとの抗争、警察への攻撃、果ては地元の政治家へのテロ行為など想像を絶する苛烈さだ。海外で実践経験のあるマフィアの部隊に対して通常の警察力では明らかに力不足だった。そのため『特別組織犯罪対策チーム』は特に実践経験と即応能力を重視して結成され標準でサブマシンガンを携帯することを許可されている。

「そして、そんなヴァイパーが近年新たに持ち込み始めた危険な合成麻薬がシルバー・ゴールドと呼ばれるものだ。

まず、この合成麻薬の一番の特徴はオーバードーズで倒れた使用者に対して暗示を仕込むことができる点だ。

暗示の内容は記憶の改竄、認識の改変、特定の行動の強制など多岐に及ぶ。そして記憶の改竄を含むがゆえにシルバー・ゴールドを使われた被害者は本人の自覚なしにこの合成麻薬の中毒になるという今までのドラッグにはない特徴がある。本人は麻薬に依存している自覚がないにも関わらず、中毒症状が現れ、無意識に麻薬を与える相手に対して近づいたり、好意をもったりといった行動変化に結びつく」

聴衆たちが息を呑むのが聞こえる。実際これほど現代社会に効果的にダメージを与える道具というのも多くはないだろう。さらにミカゼは畳み掛ける。



「これはもう一つのこのドラッグの特徴である目の前の異性に夢中になってしまふという効果ともつながっていると思われる。ドラッグの効果により、性衝動が強化され、理性が効かなくなってしまう結果目の前の相手に対して無条件の好感を抱くようになる。このため、シルバー・ゴールドはレイプドラッグとして現在世界中で蔓延し始めている」

感情的ではないものの静かな怒りに満ちた説明。会場全体が水を打ったような静けさにつつまれ全出席者がこの重大さを受け止めているのが感じられる。さすがミカゼだ。作戦だけでなく、こういった場でもまったく臆することがないとは。彼女のパートナーとして誇らしい限りだ。

「それでは、次に今回実施した作戦の概要を説明する」

そういつたときにかすかな違和感に気がつく。

「本作戦はヴァイパーの拠点の可能性が極めて高いスラム地区のホテルの廃墟への急襲作戦だった」

心なしかいつもよりも顔が赤い気がする。ひょっとして彼女は彼女で硬くなっているのだろうか。

特別組織犯罪対策チーム 特別急襲作戦報告会

Special Organized Crim Response Team
Report for Special Rade Operation





「前述したようにヴァイパー構成員は一般的に非常に高いレベルで武装していることから我々『特別組織犯罪対策チーム』の出動が要請された。…んっふう……」

「ここまできて緊張しているのだろうか。かすかに息が荒い気がする。とはいえ報告に影響が出るほどではないのだけぞ。」

「そして市街戦を想定し、目標を合成麻薬シルバー・ゴールドの押収、ヴァイパーの日本におけるリーダーと目されるパイソンの確保と…あっふうう…、せつていいした」

「どこからか水音が聞こえる気がする。だがこの会場にそんな音が聞こえるものなどあるわけがないし、俺の気のせいだろう。ミカゼにまけないように気を引き締めなければ…。」

「そして、作戦結果としては保存されていたシルバー・ゴールドを十キロ押収、末端構成員のアジトでしかなかったとお…んあっふうふうう…判明した…っくうう」

「なんとなく今までよりも彼女の口調が冷静さを欠いている気がする。こういうのを胸騒ぎというのだろうか？だが目の前で普段通り粛々と解説を続けているミカゼに不審なところは一欠片もない。」

「まっ、末端んんん、構成員のお…んふう…アジトであつたためえ…、目標は不在でえ…んっくううう…目標確保はあ…、ひゃあっはああ…しっ、失敗だったああ。だが、んんん…負傷者もでず、んくうっ…、シルバー・ゴールドも押収できたことからああ作戦は性交だったとおお…結論付けられるうう」

「なんだかまるで運動しているかのような息の上がり方。声色は不自然で表情もどこか艶めかしい。だが不自然な部分はどこにもない。いつもの格好良くて魅力的なミカゼだ。」



僕は彼女の夫として胸騒ぎを理性で抑え込もうとする。

「おっふっふあああつくうううう……」今後もおお絶対がいい…ひゃああん、そ、組織犯罪をおお許さずにい、じゃ、邪悪でえ非道なああ、組織犯罪いいい…及びいい、んっふっくうう違法薬物へのおおおぜ、ぜっ、絶対拒否の皆としてええ組織犯罪対策チームはああ、重要なのだああ」

そうクールにミカゼが締めくくる。きつとこれでゲストの方々にも俺達のチームの存在意義が伝わったに違いない。本当に俺の妻は最高にクールで魅力的だ。

★★★

などとチーム・ツールのリーダーキミヤが自分の妻の活躍を誇らしく思っている一方で現実には少々彼らの認識とは異なっていた。話は報告会の開始部分にまで一旦遡る。ミカゼやキミヤ達によつて会場が設営され、ドアが開けられる。

入ってきた中には確かに政治家や高級官僚もいた。だがその一方で明らかに今回の報告会とは無関係に見える財界関係者や外国要人の姿もあった。極めつけは素知らぬ顔でどつかりと最前列に座ったパイソンの存在だった。今回の報告会で報告される作戦のメインターゲットの男が聴衆の最前列に陣取っていたのだ。それにも関わらず特別組織犯罪対策チームの誰一人として最重要ターゲットの存在を認識しない。例外は課長のミウラだけだった。



敵のトップに挨拶しに行き、更にはその隣に座る。どこか卑屈な調子でさえある。ミカゼやキミヤから無能だとみなされ軽蔑されている彼だが、この場ではゲストたちから妙に温かい声をかけられていた。

また、会場の様子もキミヤやミカゼが認識していたものとはかけ離れていた。課の全員がただのつまらない会議室だと認識し、長机とパイプ椅子が置かれていると思っていた部屋は存在しなかった。実際彼らの目にはそのように映っていたが、現実とは全く違っている。

そこはホテルの宴会場であり、長机の代わりに丸テーブルが置かれ、装飾を施されたダイニングチェアが置かれている。テーブルの上にはきれいに盛り付けられたアラカルトメニューが置かれ、ウェイターがシャンパンを注いでまわっている。どう見てもパーティー会場であり、硬い警察の報告の場という雰囲気ではなかった。

ゲストたちが席に座り、多少会場が落ち着くとミカゼが口を開く。

「マンコテス…、マンコテス…、皆様、勃起していますか」

いつもの口調で全くためらいなく。本人の認識の上では普通に『マイクテス…、マイクテス…、皆様、聞こえますか』と言っているつもりなのだ。だが、彼女が実際に発した言葉は全く異なっており、彼女がそれに気がつくこともない。気がつくことがないために彼女はそのまま真面目に続けてしまう。

「では、これから『特別組織犯罪者慰安チーム対ヴァイパー、浮気マンコ特別急襲作戦』を始める。本日、皆様に説明するのは、私、特別組織犯罪者慰安チーム隊長、山泉ミカゼ特等オマンコ捜査官だ。よろしく願います」

そついいながら目の前のパイソン、ヴァイパーのボスに対して敬礼する。チームの名前が卑猥に改称され、作戦も改変されてしまっている。だが、そのことにも全く気づくことができないエリート捜査官のミカゼとその仲間たち。

「まず今回は組織犯罪に明るくないゲストの方もいると思われるので、今回のターゲットである麻薬カルテル『ヴァイパー』様の説明から開始する。『ヴァイパー』様は中米の麻薬カルテルの連合が母体となっていて、一部の国の諜報機関も関わっていると推測されている圧倒的で強力な組織だ。私たちなど敵うはずもないほどな」

憎むべき不法の輩に『様』をつけていることなど本人は意識できない。目の前でまさにヴァイパーの構成員がニヤニヤ下品な視線をおくっているのも、会場が明らかに真面目な会議といった趣でないのも気が付けない。

特別組織犯罪者慰安チーム 浮気マンコ特別急襲作戦報告会

Special Organized Crim Comfort Response Team
Report for Special Cheating Rape Operation



「とは言つものの、我々慰安対策チームにとつてより重要なのは彼らが日本の一般的なヤクザの皆様よりもチンポがデカく、ハードプレイを好み、さらに最新の合成麻薬でのキメセクを濫用することだ」

キリツとしたミカゼの横顔にキミヤが見惚れている。彼女の口から通常出ることがありえないチンポのサイズの話やキメセクと言つた言葉が出てきても気が付けない。二人ともいたつて真面目に報告会をしているつもりなのだ。しかし実際に表示されているスライド上ではマフィアの構成員の巨根が映され、AVのパッケージと見まごうようなハードセックスの写真が多数引用されている。しかも加害者であるマフィアの側には顔にモザイクがかけられ、被害者である女の側にはなんの配慮もされていない有り様だ。

「彼らのチンポはパンツやズボンなどに隠され、女の前で勃起して臨戦態勢になると思われる。ほとんどの構成員が股間にデカい外国製のモノをもっており、他には武器商人、ヤクの売人、調教師、ハッカー、人さらい、強盗などのチンポが国内で既に確認されている。このためヴァイパー様への捜査は一般の部署では対応が難しく、我々『特別組織犯罪者慰安課』が設置される運びとなつたという経緯がある」

真面目に海外のマフィア事情について解説しているつもりミカゼだが、実際にはまるで男に飢えた淫売のように犯罪者たちの巨根について解説してしまっている。アウトローたちの巨根とそれに奉仕する日本人の犠牲者の女子たちが多数スライド上に映されている。

「そしてそんなヴァイパー様が近年新たに持ち込み始めた素晴らしい合成麻薬がシルバー・ゴールドと呼ばれるものだ」

彼らのチームが堕ちる原因となつたクスリの名前をかすかに微笑みながらミカゼは呼び、褒め称える。

「まず、この合成麻薬の一番の特徴はオーバードーズで倒れた使用者に対して暗示を仕込むことができる点だ。暗示の内容は記憶の改竄、認識の改変、特定の行動の強制など多岐に及ぶ。その結果今の私のようにクソ真面目に皆様の前でチンプの解説をする頭が悪いオバカ捜査官を作り上げることができるというわけだな」

ニヤリッとドヤ顔で今の状況を解説するミカゼ、聴衆の間に嘲笑の笑いがさざなみのように広がる。きちんとスーツを着て真面目に振る舞っているだけに自分自身を頭が悪いと言って笑ったり、淫語を連発したりするギャップがますます会場に淫らかな空気をもたらす。

「そして記憶の改竄を含むがゆえにシルバー・ゴールドに使われた被害者は本人の自覚なしにこのすばらしいおクスリにハマってしまうという今までのレイプドラッグにはない特徴がある。本人はシルバー・ゴールドに依存しているなんておバカにも欠片も思っていないのに、中毒症状が現れて乳首がビンビンになったり、ムラムムしたり、ハメたくてイライラして我慢できなくなってしまうのだ。その結果、無意識におクスリをくださる方に接近したり、好きになっちゃった

こついつのをくれる♡



ホワイトゴールド♡

White Gold

- ・使用者への暗示
- ・記憶の改竄・認識の改変
- ・行動の強制
- ・無自覚に依存
- ・対象への好感度の変化

り、何でも言うことを聞いちゃったりするようになるのだ。まさに、今の私がそうだな、ふふふ」

プレゼンのスライド上ではミカゼが普段軽蔑しているミウラ課長に土下座し、クスリをまぶされたチンポを浅ましく啜えている様子が映されている。そのあまりにも惨めなミカゼの姿はきつちりとプレゼンを進め続けるプレゼンテーターとしてのミカゼと云々なる「コントラストを生み出す。スライド上ではいかに彼女達が籠絡し、おもちゃになっていったのかが映されるが、当のミカゼの主観の上では自分自身が薬物の犠牲者などとはつゆほども思わず怒りを込めて解説を続ける。

「これはもう一つのおクスリの特徴である目の前の男の人に夢中になってしまうのともつながっている。おクスリの効果でオマンコがトロトロになって、頭がバカになって、目の前の相手のオチンポに対して無条件にラブラブになってしまうのだ。この結果、シルバー・ゴールドはレイプドラッグとして現在世界中の裏社会で絶賛大ブーム中なのだ」

ミカゼ自身はこの解説に怒りを込めている。プレゼンの内容が彼女の痴態といかにこの麻薬が世界中で売れているかといった内容でなければあるいは人の心を打ったかもしれない。

しかし、実際彼女が怒りを込めて説明している内容はどれほど彼女がこのドラッグにハマり、チンポにハマられ、浮気エッチに日々股間を濡らしているかではないのだ。



特別組織犯罪者慰安課として日々の業務で薬漬けになり、キメセクに精を出し、夫のものではないチンポに好き放題弄ばれている事実をただプログラム通りに暴露してしまっている。こうなつてはきちんとした表情もスーツもすべて淫猥な発表に添えられたスパイスに堕ちてしまう。

「そしてもちろんこのシルバー・ゴールドには感度上昇効果もあり、純度が高いものを使ったキメセクを一度でも覚えてしまえばそれまでの旦那とのままごとのようなエッチに戻るなどできなくなってしまうのだ」

そう結婚したばかりのキミヤの隣で断言するミカゼ。もし彼女が自分の言っている言葉の意味を認識できたら怒りと羞恥で狂ってしまうかもしれない。だが、彼女は認識できない。特別組織犯罪者慰安課のリーダーとして自らシルバー・ゴールドの宣伝を続けてしまう。

「論より証拠、まずは見てもらう。この素晴らしいおクスのトリップ具合を特等オマン」捜査官の私自ら証明してみせよう」

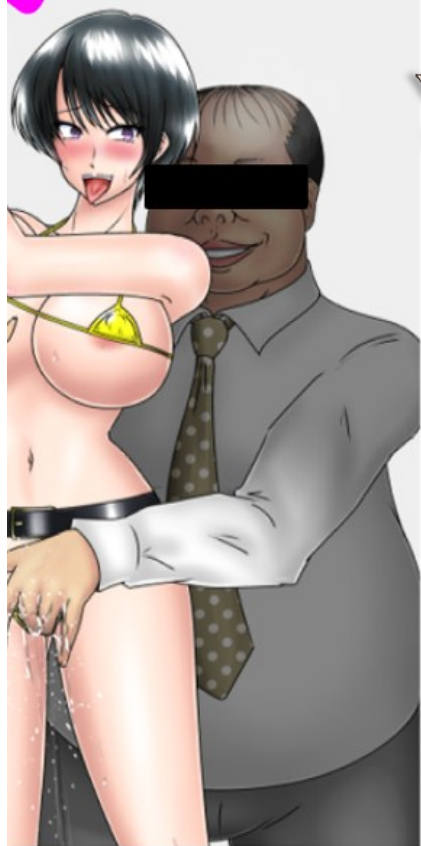
おもむろにポケットからシルバー・ゴールドの白い粉が入った袋を出し、その一部を手の甲にのせる。当然それは違法行為だ。そして正義感の強い彼女が本来絶対しないような行為でもある。

にも関わらず今の彼女にとってその行為は当然であり、目の前の聴衆に向けてマフィアを糾弾するために必要な好意だと認識してしまっている。結果、警察関係者を含む多数の腐った悪人たちの前で手の甲に鼻をつけ、慣れた感じで一気に吸い込んだ。

「んんんんんんんん……………つつくううううう☆☆☆☆つつくう☆☆☆☆☆☆き、キマるうううう☆☆☆☆」

効果は劇的だった。吸い込んだ直後、一瞬固まったと思うと、たたらを踏んで倒れかかる。そんなミカゼを背後から支えたのは伴侶たるキミヤではなかった。夫のキミヤはミカゼの異変を認識することさえできなかったからだ。代わって彼女のスレンダーでセクシーな肢体を支えたのは山泉夫妻が普段軽蔑しているミウラ課長だった。下心を隠しもしない下卑た表情を浮かべながらミカゼを支える。支えると言うより彼女のヒップを揉みしだいているという方が正確かもしれない。

こういうのをつくれる♡



ホワイトゴー

White Gold





「んふうう…ミウラ…課長う………」

艶めかしい息とともにミカゼがそう発音する。今しがたキメたクスリの影響で普段軽蔑しているミウラ課長にトキメキながら。

「ヒヒヒ、プレゼンの続きはどうした？」

そっぴいながら彼女のベルトを外すハゲ頭。

「はあい♥」

汚らしい裏切り者の腕の中で山泉ミカゼは従順にそう返事する。ミウラ課長の遠慮のない指がズボンのチャックを下ろす。ベルトの重みで大きく開くパンツスーツ。

シャンパンゴールドのマイクロショーツが聴衆の前にさらされる。当然普段の彼女が履きそうもない下品なデザインだ。まさしく今日、下品な犯罪者たちにアピールするために無意識に履かされていたのだ。

「んふうう…、そ、それではあ、つぎに今回実施した作戦のお…
…概要をお…ひゃああん…説明するっ」



普段嫌っている仕事のできない中年上司の指がミカゼの体を這い回る。形の良い胸をシャツ越しに揉みしだき、断りもなしにシャツのボタンを半分以上外していく。そして下と同じように彼女の好みとはかけ離れた下品なシャンパンゴールドのマイクロビキニがシャツの隙間からチラチラ見える。セックスアピール以外に意味のない薄い生地のおっぱいの先端に張り付き、勃起した乳首の形を浮き立たせてしまう。「つくふう…、本作戦はヴァイパーの拠点の可能性が…、…あああつふ…、き、極めて高いスラム地区のホテルの廃墟へのお…、んん…急襲作戦だったあ」

ゆつくりと、しかしねちつくミウラの指が彼女の体を這い回る。同時にミカゼの体はゆつくりと赤くなり、声もどこか淫らな色を帯びていく。

もし彼女が普段の状態だったならばミウラはどうに張り倒され、セクハラで懲戒免職になっていただろう。だが、シルバー・ゴールドにハマってしまっている彼女にとってミウラは愛おしい相手であり、体の疼きをおさえてくれる救世主のような相手であった。当然抵抗しようなどと感じることもできない。むしろどこか恍惚とした表情でしなだれかかり、体を委ねてしまっている。

「ぜ、前述したよおにい…、づあ、ヴァイパー構成員はあ…んんんつくう…、いつぱん的にい…ひじよおおにおにぶつといチンポでええ武装しているるることからああ我々『特別組織犯罪者慰安チーム』のマンコマンコのおおお出勤があよよ要請された。…んつくう……」

ここにきてクスリが回ってきたのか呂律が怪しくなる。発言にもいつものキレがなくなる。実際彼女自身の意識も混濁し始めていた。作戦の報告会だったはずではあるが、同時にいつものようにミウラ課長に抱きしめられてもいる。グズグズになる認識の中でミカゼ特等捜査官が感じるのは支えてくれるミウラ課長の魅力だけだ。

「んんんつくう…そしてええゝ市街戦をおそーていいいい、も、も、もく目標をおおごーせーまやくうシルバー・ゴールドお♥のおーしゅー、ヴァイパーしゃまのお日本におけるリーダーのおパイソン様とのセックスと…あつふうう…、せつていいした」

ミウラ課長の指があらわになったシャンパンゴールドのマイクロショーツの中に侵入する。クチュクチュと音を立ててすでによだれを垂らしている特等捜査官の蜜壺をかき混ぜる。トロトロと飛び散ったラブリュースが彼女のズボンにシミを付ける。

「あつひゃああん♥しよしてええゝさくせんけつかとしれえ、シルバー・ゴールドを百キロキロをお購入うう、パイソン様とをセックス…んあつふうふうう…れきたああ…のらああ……」

そついいながらもステージ上で中年男の指でマン穴から淫らな汁を掻き出され、普段とはかけ離れたたらない表情をさらしてしまっている。

「ひゃああああああああ、パイソン氏のおおチンポはああ、んああ
つ、れつかくれええ…んふう…よかつらあああーチームぜいんれええ
…、パコパコごほーししれえ、おマンコレえ、オチンポをおお…んつく
ううう…確保しらあああはあ…、ひゃあつはああ……」

快感に立っていることが難しくなり、オラにミウラのだらしない体に
身を預けてしまう。そしてそんな彼女の顔をミウラが自分の口の方に
向ける。ほとんど反射的にミカゼは普段軽蔑している課長の唇に自分
の唇を重ね、舌まで入れてしまう。

「んっふうう…、ちゅ…んちゅうう、ちゅぶっふうっふうう…んふっちゅり
ゅっぶぶう…、れりよおおおんんっふうちゅぶぶっふう……っぶは
ああああ」

たっぷり涎をまぶしながらまるで愛おしい人にするように目をキラ
キラさせながら普段大嫌いなハゲにキスする。腰砕けで普段の輪とし
た姿からかけ離れた発情姿をステージ上でさらす。

「んん…みんなきもちよくれええ、んくうっ…、シルバー…ゴールドも
おおたくしゃんいだけたことからああ作戦は性交だったああとおお…
け、けっろんづけけられるう」



発情した体が快感を求めて壇上で淫らにうねる。ミウラ課長がそんな彼女の顔を聴衆の方へ向かせ、何かを囁く。ミカゼは恍惚として夢見がちな表情で嫌いな上司の腕の中から聴衆の方を見る。手マンをされ、下品な下着をさらけ出しながら色っぽく報告を締める。

「おっふっああっくううっ……こ、今後もおお絶対がいい……ひゃああん、そ、組織犯罪チンポをおお許さずにい、じゃ、邪悪でえ非道なああ、組織犯罪いい……及びい、んっくうう違法薬物へのおおぜ、ぜっ、絶対マン」そしてええ組織犯罪対策慰安チームはああ、キメセクにいそみいい、パコパコハメハメしながらあ、みなしゃまのおお、お手伝いをするのだああ♥」

まるで操り人形のように囁かれた言葉を喘ぎ声とともに淫らに絞り出すミカゼ。そして、大きな声で叫ぶ。「特別組織犯罪者慰安チーム、敬礼……」

今までと違う凛とした声に一瞬ゲストの外道たちは怯む。だが、その特等捜査官の号令をトリガーとしてキミヤを含めたミウラ以外の特別組織犯罪対策課の職員が敬礼し、各々ポケットからシルバーゴールドをだして吸引し始める。

「まったく、取引を取り締まる側だと言うのにキメセクに溺れるとは情けない」
わざわざらしくミウラが壇上からミカゼを弄びながら非難する。

「あは、ああ……まったくあら。逮捕、たいほしれくれええ……んっくうう」
手マンされ潮を噴きながらそっとう。

「仕方ない、逮捕だ」

その場でミウラはミカゼの手に手錠をかける。同時に他のチームワンの女性捜査員達は各テーブルのころへ行き、自ら腐敗した政治家や犯罪者たちに手錠を差し出す。

「あつあゝあゝ、き、キメセク狂いの残念なメス共をおお…逮捕してええ思いつきりばつてくれえええええ」

ミカゼが狂った号令をかける。その瞬間、会場のあちこちで乱痴気騒ぎが始まる。本来取り締まるべき警察の特殊部隊が手錠をかけられ、抵抗できないようにされた上であちこちでゲストからセクハラを受け始める。

とは言つものの彼女たちの誰も嫌がりはいしない。シルバー・ゴールドの効果により自らにまとわりつく男たちに無条件にトキメキ、ヘラヘラと愛嬌を振りまき、あまつさえ自分から誘いさえしている。鍛え抜かれた筋肉質な体が、抵抗することもなく欲望にまみれた男たちに供されていく。

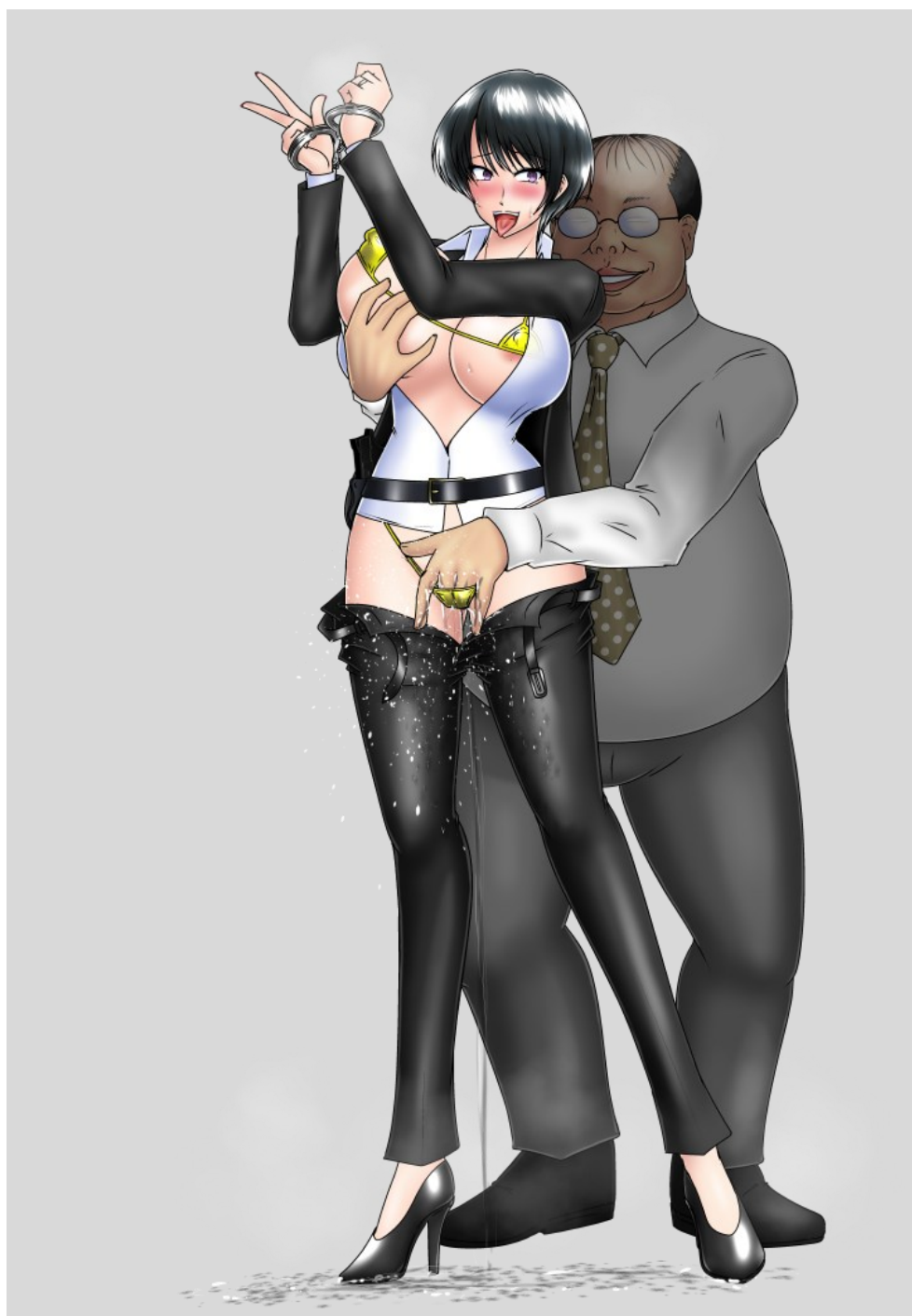
そしてその行為の先頭に立っているのが壇上のミカゼだった。

恍惚とした表情でミウラ課長に抱きしめられ、背後から押し付けられた巨根にうつとりとしている。彼女の両手にはめられた手錠を壇上のマイクにくくりつけられ、サカツた犬のように尻を振りさえる。

「ミカゼ君、いいのか？君はそのキミヤ君と結婚したばかりだろう？…私なんかとセックスするのかい？」

ミウラ課長がねちつくく白く整ったミカゼの顔を撫でながらわざとらしく問う。

「ああああ……♥いいいいんだああ。んん…こ、こんなああトキメいていてえ、ミウラ課長のことを……、んんっふう、愛してしまっているんだからあ……♥」



の声を拾い、会場不貞の宣言を全体に拡散してしまう。

「そうかそうかーそこまで言うなら遠慮はいらないな。麻薬の常習犯に浮気とはまったく君というのは不良警官だな」

愉快そうにそういいながらミウラががっしりとしたミカゼの背中を掴みつつ自分のチンポを部下の愛液を止めどもなく垂らし続ける発情穴に押し付ける。

「はあはあああ♥オチンポおお♥」

発情したミカゼの声。正気をなくしたニンフォマニアのような嬉しそうな声。同じ部屋に旦那がいることなど全く意識していないかのようだ。実際、シルバー・ゴールドに狂った彼女の脳は目の前のオスしか認識できない。

「二つ二つ、私はキミヤ君に恨まれたくないからね。ちゃんと君の方で言い訳しながら入れなさい」

あくまでも冷酷にさらに本来の彼女からはかけ離れた行為を要求する鬼畜上司。それにもかかわらず、シルバー・ゴールドの効果でもはや彼に絶対服従し、我慢出来ないほど発情してしまったミカゼは考えることもなく行動してしまう。

「はあはあはあああん、キミヤああ、すまないいい。だがああ、み、ミウラ課長のほうがあ……んっふううう……、好きなんだあ♥あいいしちやつてりゅう……だからああ……、浮気するぞおおお……」

そっぴいながらあてがわれた上司の肉勃起に向かって後ずさる。たつぷりと湿った肉厚の陰唇が媚びるようにミウラの巨根に絡みつく。

「あつ……つくつくつく……、入ってきてるうつうつ♥んつくつく、ご、誤解するなよお……はあつはあつつく……、これはあ私があ、ミウラ課長をおおお……んふう襲つてしまっているんだああ♥」

「まったくだ。麻薬の常習犯ただけでなく強姦とはほんとうにイケナイ新婦だね、君は。夫でもないチンポに對してマン」でこんな抱きしめてくるとは」

上機嫌で嘲るようにそいいながら、部下の女に腰を振らせる最低の腐敗警官ミウラ。

「ひやつはあああん♥そ、そうなんだああ、我慢できなくれええ、んんはああ、課長をおお襲つてしまう淫乱なんらああ♥らつてえええ、ミウラ課長ステキからああ♥」

「ふふふ、ステキか。何がいいのかね？答え次第では君の強姦罪を忘れてやってもいいかもしれないよ」

鍛えられたミカゼの尻がパンパンつとミウラの腰に首を立てながらぶつかる。同時にステージにポタポタと垂れる愛液。湯気が出ていることから彼女がどれほど興奮して熱くなっているかが見て取れる。

「あああ……つくつくふう、ミウラさんはああ、格好良くれえ……あん♥♥仕事ができえ……んんつくふうやさしくれえ、ステキなんれすうふう♥♥」

普段ミカゼが影でハゲ無能と罵っている相手に対して媚び媚びの脳死状態で褒めまくる。もし普段の彼女が聞いたりしたらあまりの恥ずかしさに正気を失いかねないだろう。だが彼女は正気とは言えないジャンキーだ。

「ほおお、いい答えじゃないか。私はいい部下に恵まれたようだな。強姦の件は忘れてやろう」
そついうが早いかミウラは今まで一方的にミカゼがしていた腰振りにあわせて突き上げる。

「つひよおおおおお♥♥つきつらああああ♥♥」

目を白黒させながら嬉しそうに叫ぶミカゼ。気持ちよさそうに中年上司が腰を振り始める。先程よりもさらに力強くパンパンッパンつと腰と腰がぶつかり合う音が会場に響き渡る。

「あつひゃあつくつ♥んつふううう、これーこれーすー」iiiiiiiiii♥♥

「旦那のチンポとどっちがいいんだい？」

わざとらしくそう問いかけながら半脱ぎのミカゼの尻を遠慮なく叩く。

「ふあああん！そんなのおお、く、比べるまでもないiiiiii♥こつちiiiiii♥ミウラ課長のおおオチンポがああいいんだああ♥んつふうう♥

でかくれええ、たくましくれええ♥きもちいいんだらあ♥アイツのはああ、ぜんっぜん気持ちよくううないからああ♥

顔を快感にとろけさせながらミカゼが叫ぶ。激しいプレイにより様々な液体が彼女のパンツスーツやジャケットに飛び散りシミを作っているがそんなことはお構いなしだ。ただひたすら快感を貪り、憎むべき上司に媚びようとする。

「ほおお、キミや君は無能チンポだったか。それは残念だな。チームの恥さらしだ」

はだけたミカゼのおしりを遠慮なく叩くミウラ。その痛みさえも快感の刺激となってミカゼの官能をさらに刺激してしまふ。

「しょう♥しょうなのおお♥アイツはああ……んああ、無能チンポおおー！無能チンポなのおおお、チームの恥晒しいいい、あんなのと結婚したなんれええ……あつああんつふううう、私の人生のおおお……んっほおっおおお、汚点なんつらあああ」

ただ思いつくままにミウラの好みそんな言葉をラブジュースとともに吐き出し続けるミカゼ。普段彼女がハゲ無能と罵っている相手に対してだ。彼女の誇りともいえる警察のIDがブランブランと彼女の喘ぎ声に合わせて揺れる。

「ミカゼ君は私と結婚したほうが良かったようだね」

「そう♥そうなんだああ♥んっふううう、ミウラ課長とけっこん、結婚しら方がああ…ああっ、しあわせだったああ♥ミウラ課長の方がすきうっらんだああああ♥あああんん」

「まっ、君も無能だからそういう間違いを犯すんだよ。」

そういう意味で君たちはお似合いのカップルというわけだ」

普段のうっぴんを晴らすかのようなミウラ課長の嘲り。それにさえも媚びるように正体をなくして反応するミカゼ。

「ひゃああああ♥そんなああ、私をあんなヤツとおお…一緒にしないでくれえええい♥んっふううう、私は…んっふううう、たしかにいい、無能つだがああ、浮気してええ、ちゃんと有能チンポのおおお、精子をおおもらえってるだろおお♥んっはあああ」

もともとミカゼの高いプライドが最悪な形で発揮される。無能だと言われることに耐えられない彼女はミウラの期待通りに愛する相手を傷つけるやり方で少しでも優位に立ちとつとする。

「おおっほおお、ミカゼ君のマンコが締め付けてきた。そんなに私の子種がほしいのかい」

「しょう、しょうなんだ♥有能ザーメンをおおお、注いでもらうてええ、アイツより優秀なDNAで孕ませてほしいんだ♥アイツと育てるからああ…んんふあああん♥種付けしてくれえええ」

ミカゼ。そんな彼女の腰を悪徳警官の上司がぐつと掴みまるで犬の交尾のようにのしかかるように密着する。

「ひゃあっ♥はああ…♥やつばいいいい♥トキドキしてええ♥らめ、らめ、らめなんだああああああ♥はあああつくうんんつくうう♥あああつくうううう………つはあああああ………」

密着した体勢でビクンビクンと震える二人。ミカゼの視線の先にはキミヤがいる。勝ち誇ったようにキミヤの方に汚い笑みを浮かべる課長。そして、ゆつくりと離れ始める。

「ふううう、さすが我が課のエースだけあつてなかなかの使い心地だ、ぜひ他の皆様にも堪能していただきたいな」

ゆつくりと抜け始める中年男性の陰茎。白いザーメンがトロトロと竿に伝ってこぼれていく。

「あつひゃああああ………」

快感にとろけたようになって立つているのが精一杯のミカゼの尻を叩く。

「ほら、無能ーほうけていないで、ちゃんと他の皆さんにもアピールしなさい。私は皆さんが楽しめているか確認に行くからな」

「あつふうう…ひゃああいいい…。んふうう…、さああ、皆さんんん、私のおおスペシャルおマン」にいい無責任ザーメンを垂れ流してくれええ。夫の前で浮気するううエリートマン」にもっともつとハメてくれええ」がに股でフラフラしながらとろけた笑みを見せる。彼女の割れ目からは射精されたばかりの大嫌いなハゲ無能のザーメンがタラタラと糸を引いて落ちていく。そんな彼女をすでにその場の多くのゲスたちが狙いを定めている。キミヤの目の前で繰り広げられる歪んだパーティーはまだまだ始まったばかりだ。そして彼ら

たちが何が起こっているのかを思い出すこともないのだ。『特別組織犯罪対策チーム』は表向きは成果を上げ続ける。裏側で行われている背任の宴を本人たちさえ気が付かないまま。

第零話：すべてが始まる前に

タタタタタタ

射撃音がする。埃っぽいストリート、黒い布で顔を覆ったサングラスの男達が窓越しにこちらに向けて撃ってきている。精度が良くないのか、正確なこちらの位置がバレていないのか着弾位置は不正確だ。だがそれでも私達は動けない。

ガソリンの匂いがして、そしてそのまま装甲車の駆動音が近づいてくる。次の瞬間ズダダズダダズダと重いマシンガンの射撃音が聞こえ、私達の前にいたサングラスの男たちが窓ごと沈黙する。

「Go! Go! Go! Go!」

私が叫び、ストリートを横断し、破壊された窓から建物に突入する。飛び散った破片と肉片、まだ舞い上がったままの埃をものともせずに一気に廊下への扉を蹴破る。

次の瞬間、別の部屋からパンパンパンと射撃音が聞こえてきて、身を引く。私の背後の仲間がスタングレネードを見せる。そしてピンを抜くと廊下の向こう側へ投げ込んだ。次の瞬間全員が目と耳を抑える。響き渡る衝撃。

即座に私は仲間とともに突入する。

数人のギャングたちがうずくまっていた。

「Drop down! Drop down! Drop down!」

スタングレネードで耳をやられていることなどお構いなしに吠え、そいつらに武器を捨てさせ、武装解除し、手錠をかける。

まだ二部屋目だ。

後続の人員に武装解除させたギャングどもを任せて私達は再び廊下へ出る。廊下の両側にはもう二部屋見え、突き当りには階段がある。ハンドサインで私のチームが右側、後続のチームが左側をクリアすると示す。ドアの脇に立つて仲間たちにカウントを出す。そしてタイミングを合わせてドアをサブマシンガンの銃床でぶち破る。その瞬間嫌な予感がある。突入しようとした仲間たちを静止する。ほんの一瞬の差、あとゼロコンマ一秒遅れていたら危なかった。

耳をつんざく轟音、吹き飛ばされる壁。

ひどい化学薬品の匂いに鼻が潰れそうになる。

もしあのまま勢いに任せて突入していたら間違はなく私達は最初の部屋のギャングたちのようにミンチになっていただろう。

ブービートラップを兼ねた証拠隠滅。あたりに漂う薬品の匂いやガラス片、強烈なケミカルの臭気が間違はなくここで行われていたこと、ドラッグの製造を示している。ただ、それがどれほどの規模で、どのように製造され、そしてどれほどの量がストックされていたのかは今や闇の中になってしまった。



私達が背中をあずけていた壁は吹き飛び、それどころか二階の床も吹き飛んで上の階があらわになってしまっている。それほどまでに破壊的な爆発だったのだ。

「クソッ」

思わず日本語で呟く。完全に情報が漏れていたとしか思えない。

何より、実態を調査するべくわざわざ無理して国外での作戦にまで秘密裏に参加したというのに、この分だとほとんど全ての貴重な情報は消されてしまっているだろう。

わかったのは相手がまともな神経をしていないほど荒っぽく、豊富な武器と情報源をもっていて、場合によっては警察組織と癒着している可能性さえもあるということだけだ。

爆風に巻き上げられた布切れが目の前を舞っている。黒地に赤い薬瓶に巻き付いた毒蛇、麻薬カルテル『ヴァイパー』のシンボルだ。私はその布切れを掴むと怒りのままに踏みつけた。

